

きぶのさと

NO.119
月刊

昭和四十三年四月一日発行 一非 素品
岡山県赤松郡吉備町京町字垣方
吉備 観老 協会
第118号

地藏堂 (その二)

地藏尊はもと六道能化菩薩(りくどろのうけほさつ)といわれ、釈迦が入滅後
はこの世の中が無佛となつて地獄や餓鬼道に墮ちる衆生を済度(一人を煩悩の
苦海から救う)するまう、釈尊から傳つたと經文には認められる。わが國に
傳つたのは、東洋や觀音にフソで古くから信仰されたものである。

これは奈良朝時代から始まり次第に民間に流布するようになった。それと御
村制度と共に地域的、或は部落單位の共同體によつて祭祀する行事になつた。
これが觀音講とか地藏講とかいわれ一堂に會して先祖の靈魂を弔ひ、或は
後生大事と鉦、大鼓を敲つて念佛を唱えるのである。

徳川時代には地方分権制度によつて支配者は領内の農民を、生かす殺さ
ず行政策のもとに庶民に講組をつくらして人生の觀念的思想を培つたのであ
る。また、切鬼が不慮の火害に遭つて死した時は、その場所には石地藏尊を安
置して冥福を祈る習慣がある。これは地藏尊の容貌が、いかに紅顔の可
憐な童子に似ている所から始まつたものらしい。一年一回の祭りを催して子
供奉位の地藏盆を行ふ部落もある。
近來宗教の衰退と共に信仰心はうすらぎ、このお講もただ隨性的に催され

ているのがある。經典を暗誦しているものは殆んどなく、また、覚えようとす意
欲もない。徒らに端座して「あつき念、」程度を時をかせ、終ると逃げるよう
に解散してしまふ。中には實際の場所として世間話に花を咲かせ、飲食奉位に
替つてきたのも考えようによつては、よいともいえるのである。

地藏堂

足守川の西堤防大橋の西詰にある。南向の一間四方の小堂にして、うちには
石地藏尊の立像を安置している。蓮台の上に身長三尺の尊像を置き、更に一段
の台石がある。上段の台石の正面には「大橋地藏講中」と彫んであるが、創
建の年号は鬼当らない。浅彫であるが、豊富な容貌をあらわれ、俗に法界様
とも呼ばれ昔から首より上の版に靈感があるといわれ、近在まりの賢者も多、
毎月廿三日には部落のものゝ祭祀を行つてゐる。もと堤防の西側街道に北回して
いまの日車大明神社と向ひ合つてゐたが、足守川の堤防を改修する時、日車大
明神の社は現在の新國道の梅川橋の西詰北側へ移れ、この地藏堂も亦現地を相
して移したものである。

堂の内部天井は、巨角にくぐられ、それに似るような絵画が描かれてある。その傍に奉
仕者の名が見える。消えて定かでないものもあるが、拾つて見ると

岡屋政吉(東町の岡村(の老)) 現銀屋藤吉(狭川町所司利男(の老)) 矢田部屋
市三郎、日比邑脇舟長八、新地初治郎、橋本屋音吉(平り某(の老)) 橋本

△

屋源吉(平川達治の先) 丑詣人 道具屋富三郎(平松哲男の先) 鳥羽屋重兵衛(難波貞一の先) 高田屋増吉(難波某) 岡山花尻鬼島屋藤三郎 下撫川大工音吉 鬼島忠吉 小御印三郎(小御利郎の先) 曾我宗五郎 荒木仁吉 町内坪井元平(坪井元次郎の先) 水元愛介(水元一郎の先) 難波伊三郎(難波久男の先) 高島惣吉(高島熊田の先) 難波静夫(難波恭文の先) 倉子坂辰屋、岩崎市五郎 丑詣人 大橋若連中」 この堂も足守川改修で他に移転した。

日車大明神

西向地内の国道ニ号線撫川橋の北側西詰にある。一小社にして石葺表に「日車大明神」の石額が懸けられている。石柱には「昭和十五年二月建之、幸原 殿 林 亨平 献上」の銘がある。潜るとニ基の石灯笼が西側にある。左に「奉献 天保九年戌十月吉日」右に「奉献 昭和十六年七月建之 難波恭次」と刻んである。石の唐獅子の傍に自然石を彫った手水鉢がある。「天保八回年九月吉日、大橋町 信者中、丑詣人 惣右エ門、茂吉、富吉」の名が下部に見られる。社は四圍に三間の本瓦葺屋根にして妻入である。もと撫川大橋の西詰にあつたが道路改修の時にここに移したもので西向の部落の人たちが日蓮宗によつて祭祀するという。

四三

△

創始年月は詳かでないが日車大明神というは高松の稲荷大明神の眷族といわれ白狐を祭つたものであるから高松稲荷から勧請し部落の鎮守にしたものらしい。奉献の石灯笼の銘によつて天保年間の創始と思われる。境内に高さ三尺ばかり無縫石に安政二年建立の「地神」がある。雄渾な筆跡は如何なる人によつて書かれたものか判らぬが近郊では類のない立派な書体である。この明神も足守川改修のため他に移転した。

△ 細所の観音堂

細所の路傍にある。一向四方の一辻堂である。祭るところは観世音菩薩にして本尊は一尺ばかりの本造の佛像である。傍に一石碑がありその銘に「名明真言世万遍塔 明治三十五年吉辰 建立主 願 禪壽院 義祥 信士 浅沼清太郎」 台石に「奉祀者 浅沼金四郎 浅沼新助、大 飼市太郎」とある。

△

中田の法界堂

庭瀬中田の所はそれの街道の東側にある。創叙の年代は不詳であるが石灯笼の銘に文政とあるのでその頃の建築と思はれる。お堂は南向にして二間四方の入母屋造の本瓦葺屋根と、その奥に流造本瓦葺屋根の一小祠がある。御神体は神籬なるも日蓮宗の宗祖日蓮

上人を祭るのである。中田部落の管理に属し毎歳この堂に集まり祭祀を行ふという事であるが、現在建物を改造して部落の公民館に使用してゐる。一小祠の右に列んで二基の碑がある。

右は二段の台石の上に自然石(高さ七十程)の表面を平らに削つて「大覚大僧正」と彫つてあり、上部の台石には「中田村宗門中」とある。

左は三段の台石(下段一。程角、中段は八十二程角、上段は五十二程角)の上に高さ一四五程、中三六程角の主石を置いてゐる。上段の台石の正面に「法界萬靈」左面に「中田 謹中」と刻んでゐる。主石の正面には「南無妙法蓮華經 日蓮大士」、右面には「文化八年未年」、左面には「十一月十三日」とある。街道の側には一段の台石の上に高さ一三五程、中二五程の主石を置いてゐる。正面に「天四海北自帰妙法」、右面に「明治二年乙丑三月吉祥日」左面に「末法萬年廣宣流布」と彫つてゐる。裏面に在詔人の名が数名刻んであるが文字極減して判読しがたい。

△ 奥谷の番神堂

西花尻の奥谷にある。岡山県赤松年の家に通ずる路から岐れて西へ約二百米程道をせると向山の中腹にある。

創立年月を明かにすることは困難なるも昭和三十一年六月に建物が朽壞したので修葺されたが、その際天井裏から古い棟札を見出したことがあるが

記載してある文字が古びて判読しがたくそのまゝに置いて置いたという。

番神堂はソウマでもなくミナ番神を祭つたもので昔この附近に寺院があつてその鎮守堂ではなかつたらうか、寺址らしい遺跡も見当らない。古老の説によるともと粟山の天台宗真如院の管理であつたが、延元年間に大覚大僧正が日蓮宗私通のためにこの地方を巡錫せられた時多くの天台宗信者が改宗したのでこの堂も日蓮宗に属したらしい。ミナ番神は元來日蓮宗に祭祀せられる鎮守であるが起源は天台宗本山北畠山延曆寺の守護、白玉堂鎮護の神として祭祀したことに始まるのである。(別項川入のミナ番神社参照)

本堂は入母屋葺茅葺屋根にレテ三間に二間半、その奥に流造の宮がある。周囲にお坪を繞らしてゐるが、ソマは大半崩壞して荒れてゐる。御神体を拝するに高さ五寸位の木彫座像の衣袴束帯の姿である。思ふに菅原道真の尊像にして番神堂に祭るは、いぶかレきことである。

春秋ニ季には正法寺の僧を招き奥谷部落のものが祭典を行なつてゐる。

△ 花尻の妙見堂

岡山市花尻の天神山の中腹にある。妙見はソウマでもなく北斗七日生を祭るのであるが中興に至つて能勢の妙見が栄えようになつて成田になり改め各各地の日蓮信者がこの妙見の分霊を乞うて祭る習俗が起つたのである。記録によると明治の前に加賀陽郡(吉備郡)立田村(高松町)の妙見山

の洞裡内明院日禪上人がここに鬼子母神を祭る堂を建てて久遠講を興
レ多くの信者を召集めた。現に本尊は高さ一尺七寸五分着衣を被った鬼子母
神の尊像を厨子に納めてある。右脇には毘沙門天の佛像もある。思うに
中興妙見の名が栄えたのを妙見堂に改めたのはなからうか。堂は三間四
面の入母屋造りにして本瓦葺屋根である。境内は狭いが眼下に平野を見お
ろレ風景がよい。明治二十年十一月日禪上人は下總國正中山法華經寺に入
りて百廿日間の修行を積み先づ上道即乎井村(岡山市)に歸山した際この
地の久遠講の人々が多数歩向を受けたとソウ。

現在には東花尾の正成寺の管理に属レ庵寺として尼僧が朝夕勤行を怠ら
ない。

大内田の地藏堂

大内田から早島町へ抜える峠道の庄村へ岐れる道の南側に九十程四方の同
じ建物の御堂が三つ併んでゐる。これは大内田地内に設けられてゐる八十八ヶ
所のうち第五十四、五十五、五十六番の札所である。札所というは四圍八十八
ヶ所の霊場に做つてつくられた巡礼道である。

左から第五十四番

浮彫り地藏尊二体 台石に「治三郎」とある。

第五十五番

浮彫地藏尊二体 座像一体 台石に「施
主下庄村 平松信三郎 甚話人 大内田村

七
八

坪井実之進」とある。

第五十六番

座像の地藏尊 三体 台石に「槲山寺
庄影村中」とある。

いづれも高さ五十程の石地藏尊を安置してゐる。

この地藏堂のうち第五十五、五十六番の二つの御堂はもと東の
山中の巡礼道にあつたが、この山林を所有する早島町矢尾の平
杉 豊次が倉敷市水島の石井順一とソウ人に譲渡した。所が山を
崩れて開墾するに當つてこの二つの御堂が邪魔になるので他に
移転せねばならぬことになつた。地藏尊は信仰の対照になるものな
ので無造作にとこへでもよつとソウわけにおいかな、初め四又主の土地の片
端へ移す予定だったが石井氏が拒んだので相談の結果三谷の地藏堂
の處へ移すことにした。が札所の順番がくい違ひになるので、それではソカ
ぬということと近くの田圃の傍へ移すことに変更した。今度は田圃の
持主である坪井強獅とソウ人が無断で決めたといふので兼知せずや
むなく県道の東側へ移すことにした。所がソウくと違義が出て結局
現在ある第五十四番の御堂の所へ併べて移轉することにどうにか決ま
つた。この遷祀には終始大内田の森谷老造が主となり数名の村人たちを
使つて漸く安置した。昭和廿八年三月のことである。この時第五十六

の御堂の下から丹漣り一尺ニミ寸の飾りものない錆びた刀剣が没収見された
この刀剣はもと徳芳の氏神八幡神社へ奉納してあったことが後ちに成つて
判明した。誰れが盗み出し持つたが何か不吉なことがあつて、切切か
にこゝへ隠したのではないかと噂が立つた。そこで誰一人として保存しようとい
うものはなく、結局大内田の千手寺に納めたりよからうとしようことになつて當
寺へ奉納した。ここに不思議な事件が持ちあつた。それは此所が移つ
たからか、間もなく、数日後のことであつた。坪井強獅の宅には老母が、中
元氣をなかつたが急に病にかかり病院へ入つたが間もなく死んでしまつた。
またこの土地を買求めた石井順一の家族にも病人が、突來々長患ひした。ま
た木村登造は野良仕事に牛を追つてゐた所、突然牛に下腹部をぶかれ
て、重傷を二度も医師にかかり長患ひした。また土地の売買を固執した下
極川の高木茂一は中風氣味にて長く床に呻吟した。殊に千手寺の住
職松本孝正は東花尾の葬儀に列席して、読経中俄かに気分が悪くなる
あと倒れたまゝ、氣を失ひとつた。若林医師は臍出血と診断した。住職の葬
儀には前記の刀剣を魔除として、死骸の傍へ置いたと云う。

この刀剣にはなにか銘が刻んであつたというが、夏台寺でも思ひて念石殿、繁
習者へ差し出した。整と察でも錆び々、価値がないものとして、廢棄命令に
した。昔から「障りぬ神に祟りなし」といふことがある。巻間では神佛の祟りに
触れたものだと噂しあひ、部落の老人たちは今更のやうに神佛の四討を心配したと
いふ。現代の青年たちはそんな馬鹿げたことがあるかと、一物事に附す
ることであらう。

△ 向庵大師堂

向庵大師堂は大内田の山中にある。大正十一年の頃、極川大橋に住んでゐた荒
木直造という人が、或る日晝に録をしてみた所、大橋の上から北南にあたる
山中に一つの井戸があつて、その中に弘法大師の靈次女が映つたといふ。靈夢を心得
し、その所在を探せ求めて大内田の向庵大師に辿りつた。向庵には荒れ果れ
た小さなお堂が一つと荒井草堂の古い墓が草叢に立つてゐる。はかりである
雑草をわけていくと竹藪に覆われて古の井戸が鬼つかつた。これがさきに書
いた井戸に違ひがないと信じ一家揃つてこの大師堂に参籠し拜殿をシつら
うと一念信仰の道に入つたのである。

(おわり) 未完

飲食物

よしや旅館

山陽線庭瀬駅前
電話 〇・〇九五四

位本着消費

吉備ストア

吉備町郵便局西隣
電話 〇・〇四三四